

ウワミズザクラ *Padus grayana* (Maxim.) C.K.Schneid.

バラ科 Rosaceae

1. 利用対象部位：内樹皮および外樹皮

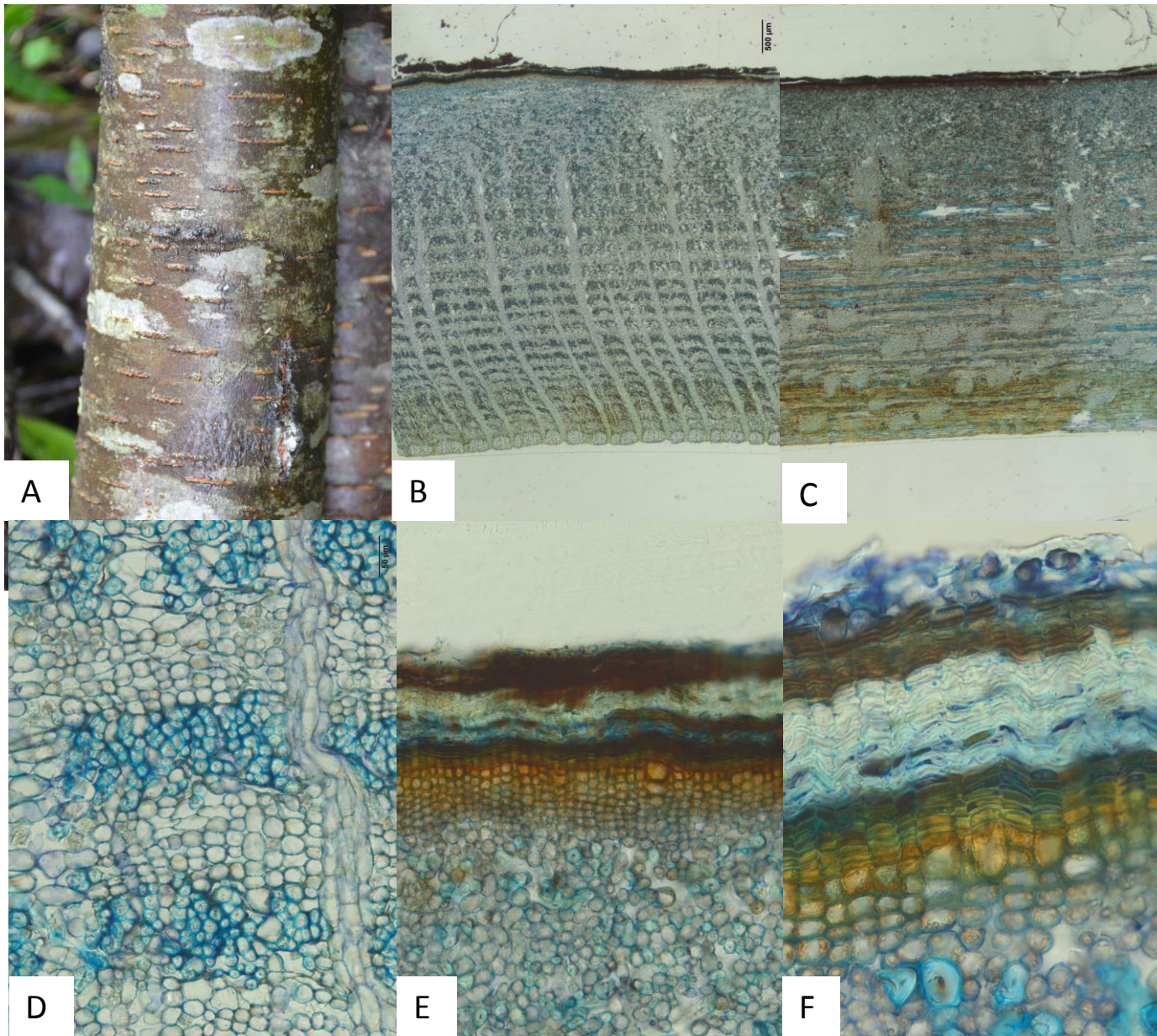
2. 組織形態：

樹皮は横断面で見ると内樹皮が大部分を占め、外樹皮は極めて薄い。機能している二次篩部は最内部の1層に限られ、それより外側は機能を失って、変形し、押圧されている。放射組織は大きい。機能している二次篩部から少し外方あたりから潰れた二次篩部の位置に繊維組織が分化してきて、あたかもシナノキやニレ属の樹皮の繊維組織塊のようになる。周皮には数細胞層の科尔ク皮層、科尔ク形成層、科尔ク層があり、科尔ク皮層の細胞は水平方向に長い紡錘形で細胞内容物を持つ。科尔ク層の細胞はヤマザクラなどと同じく放射断面では長方形だが、横断面ではやや長い長方形で、細長い短冊形にはならない。接線断面では短い紡錘形～多角形をしている。

3. 利用：

科尔ク層は薄いため、ヤマザクラやオオヤマザクラのような利用は出来ない。内樹皮に二次的に分化してくる繊維組織はシナノキなどと同じような利用が可能なのかも知れない。

4. 遺跡出土遺物：知られていない。



A:若い個体の樹肌。樹皮を利用するヤマザクラなどと変わらない。**B:**樹皮の横断面。大部分が内樹皮で、外樹皮(コルク層)は最外部(上)の黒色部分のみ。幅広い放射組織が押しつぶされて斜めに走向。**C:**樹皮の放射断面。内樹皮には大きな放射組織が見える。**D:**内樹皮の厚壁組織の層の拡大。柔組織の層と厚壁組織の層が交互にある。**E:**外樹皮付近の放射断面。外樹皮は薄く、褐色のコルク皮層(画面中央)とその上側のコルク層が見える。**F:**外樹皮付近の放射断面の拡大。コルク層の形成は少なく、直ぐに押しつぶされている。